

〈研究ノート〉

AYA 世代がんサバイバーのレジリエンス

—Y さんのライフヒストリーから—

日高直保*

*大阪大学人間科学研究科

Resilience of AYA Generation Cancer Survivor:

A Case Study of Ms. Y

Nao Hidaka *

* Graduate School of Human Sciences, Osaka University

〈要旨〉

本研究は、AYA 世代がんサバイバーの経験を記述し、そのレジリエンスを明らかにすることを目的とした。AYA 世代がんサバイバー 1 名へのインタビューを行い、ライフヒストリー法を用いてその経験を詳細に記述した。考察においては、記述した経験をレジリエンスという視点から検討した。ライフヒストリーの記述を通じて、身体的・心理的な辛さを抱えながらも、周囲の人々との交流を支えに治療を乗り切り、人生プランを作り直す契機として、白血病に罹患した経験を意味づけた AYA 世代がんサバイバーの姿が描き出された。AYA 世代がんサバイバーのレジリエンスとしては、人々と交流しそこに楽しみを見出す力と、現実を的確に認識し未来を志向する力および行動力があり、それらが結びつく中で、経験を肯定的に意味づける力が発揮されていったと考えられた。また、重要な他者との間で愛着が形成されていることが、AYA 世代がんサバイバーがレジリエンスを発揮する基礎となる可能性が示された。

キーワード

がん治療

AYA 世代

がんサバイバー

レジリエンス

ライフヒストリー

cancer care

Adolescent and Young Adult

cancer survivor

resilience

life history

I. 問題と目的

1. AYA 世代について

AYA 世代とは、Adolescents and Young Adults の略語であり、15 歳～39 歳の年齢を指す。年間約 100 万人ががん罹患する本邦において、AYA 世代の罹患率は年間約 2 万人と数少ない。AYA 世代は様々なライフイベントを経験する時期であり、特有の心理・社会的ニーズを有するため、この時期におけるがんへの罹患は様々な問題を当事者にもたら

す¹⁾。そのため、AYA 世代がんサバイバーを支援する上では、それぞれのニーズに合わせた支援が必要であるとされる²⁾。しかしながら、医療者の経験やケアに関する知見の集積が少なく、AYA 世代がんサバイバーに対し有効なケアについて明らかになっていることは少ない²⁾。

AYA 世代がんサバイバーを支援する上での課題として、発達段階に応じた心理的サポートや生殖や妊娠性に関する問題、就学や就労に関する問題が挙

げられている³⁾。そして、上記それぞれをテーマとして、個別的に研究が行われてきた。例えば、就学に関しては、院内学習における工夫や復学に際する多職種連携の必要性、高等教育における学籍移動の難しさが指摘された⁴⁾。また、就労については、健康上の問題に加えがんに対する周囲の理解不足が就労困難に結びつくこととされ、就活制度の改善や相談業務の充実が求められている⁵⁾。

以上のように、AYA世代がんサバイバーが抱える種々の問題について個別的な研究が行われている。しかしながら、AYA世代がんサバイバーが抱える問題について、テーマ毎に研究を進めるだけでなく、そのニーズを包括的に評価することも重要とされる³⁾。がん対策推進基本計画（第3期）⁶⁾においても、「年代によって、就学、就労、生殖機能等の状況が異なり、患者視点での教育、就労、生殖機能の温存等に関する情報・相談体制等が十分ではない⁶⁾」と指摘された。AYA世代がんサバイバーの多様なニーズと視点を反映した情報が必要とされており、AYA世代がんサバイバーの経験について、個別性を尊重した記述を行うことに大きな意味があるといえよう。

2. AYA世代がんサバイバーとレジリエンス

また、「過酷な経験を経て、なお生き残った人々⁷⁾」という、サバイバー概念の原義をふまえ、がんサバイバーという用語を、がんへの罹患という危機を生き抜いた個人と定義すれば、AYA世代がんサバイバーについて理解を深めるためには、AYA世代がんサバイバーが危機をいかに生き抜いてきたか検討することが必要であると考えられる。そして本研究では、AYA世代がんサバイバーが危機を生き抜く上で重要となる要因として、レジリエンスの存在を挙げたい。

レジリエンスとは、大きな脅威や深刻な逆境に直面した際に、個人が発揮する力および、個人が適応を達成するプロセスを総称した概念である。レジリエンスに関する議論は多岐にわたるが、1) 危機的状況、2) 適応を促進する個人的要因および環境的要因、3) 適応状態、の3点を構成要因とする概念であることは、数々の研究間で一致している⁸⁾。

レジリエンスは、様々な領域で注目されている概

念であり、医療への適用も可能であると考えられる。先行研究⁹⁾では、レジリエンスという概念は看護領域においても活用できる概念であり、がんサバイバーががんとともに生きる過程を支援する上で、有益な概念であるとされている。以上の指摘は、AYA世代がんサバイバーの経験を理解する上でも例外ではないだろう。AYA世代がんサバイバーのレジリエンスを明らかにすることは、AYA世代がんサバイバーがいかに危機的状況を生き抜くかという問題について、個人のニーズと視点を反映させながら理解を深めることに結びつくと考えられる。

これまでの研究では、ライフヒストリーという形でAYA世代がんサバイバーの経験を詳述した上で、そのレジリエンスが検討されている¹⁰⁾。その結果、周囲からのサポートの重要性が指摘され、経験を肯定的に意味づける力、および自らの望みを現実化する力が、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスとして挙げられた¹⁰⁾。

AYA世代がんサバイバーのレジリエンスについて、上記のような研究はすでに行われているものの、先行研究¹⁰⁾における事例の提示は一ケースにとどまっており、更なる検討を行うことにも意義があると考えられる。発達課題や思春期的特徴の存在により、AYA世代がんサバイバーへの理解が難しくなると指摘されている¹¹⁾ように、がん罹患することそのものの多様性と発達の特徴が相まって、AYA世代がんサバイバーの経験は極めて個性が高く、理解が難しいものとなるためである。発達途上にあるAYA世代がんサバイバーについて理解を深めるためには、その経験を詳細に記述し、危機を生き抜くことを可能にしたレジリエンスについて、個別性を尊重しながら検討する試みが続ける必要があるといえよう。

そこで本研究では、大学在学時に急性リンパ性白血病に罹患した個人の語りをもとに、AYA世代がんサバイバーのライフヒストリーを作成し、そのレジリエンスについて検討を行う。そして、得られた結果を先行研究¹⁰⁾における議論と比較検討することで、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスについて理解を深めることを目指したい。

II. 方法

1. 調査協力者

20年ほど前に急性リンパ性白血病に罹患した、30代の女性1名（Yさんと表記）を対象とした。Yさんと研究者は、研究者が参加した患者会の主催者による紹介を通じて知り合い、研究協力をお願いし、インタビューを実施することとなった。

2. 調査方法

1対1の半構造化インタビューを行った。インタビュー時間は1時間半ほど、全1回であり、プライバシーが守られる環境で行なわれた。インタビューでは、「がん罹患してから今までの経験について、印象的な出来事やその時の思いなど、自由に語ってください」という問いを皮切りに、Yさんの経験を通時的に聴取した。

3. 倫理的配慮

研究協力に際し、大阪大学人間科学研究科社会・人間学系倫理委員会より承認を得た。また、インタビューに際しては、調査協力者に「研究内容説明書・協力調査書」の書面を用いて研究内容の説明を行い、面接内容の録音、記録も含めて同意を得た。加えて、インタビューの途中でも中止が可能であることを十分に説明し、研究の途中で協力を中止した場合でも、不利益を被ることは無いことを保証した。

4. 分析方法

本研究では、小林¹²⁾によるライフヒストリー法に基づき、ライフヒストリーを作成した。ライフヒストリーとは、個人の語りを、語りに含まれる時間の流れに注目し、まとめたものである¹²⁾。ライフヒストリーの作成は、語りを他者にも理解できるように時系列にそってまとめながら、語りに含まれる様々な意義を解釈するという手順でなされる¹²⁾。

以上の方法をもとに、Yさんの語りを、がん罹患からインタビュー時までの経験としてまとめた。具体的には、まずYさんの語りを繰り返し読み、その内容を把握した。次いで、語りにおいてキーワードとなっていた言葉や、主たるライフイベントおよび語りの特徴、そしてYさんの力というポイントに注目しながら、Yさんの語りを時系列に沿ってまとめた。

III. 分析結果

以下の記述において、「」が付けられた語句や語りは全てインタビューの語りからの抜粋である。逐語録からの引用部分では、重要な語りに下線を引き、特徴的な語り口を四角で囲った。また、語りの省略や補足説明を加えた場合は〔〕内に記載した。

1. 白血病への罹患

Yさんが白血病に罹患していることが発覚したのは、200X年3月であった。「最初の自覚症状」は、股関節や肩の関節に生じる関節痛であったとYさんは語る。「1週間ぐらい痛いけど勝手に治まるというような」症状が半年ほど繰り返される中、体調の悪化が進み、微熱などが生じていった。そして、関節の痛みによって日常生活にも支障をきたすようになり、Yさんは地元にある大きなA病院を受診、白血病に罹患していることが発覚したのであった。

この時、Yさんは、「ああ、人生20年か」という思いや、「ああ、そうなんだ」という「ちょっと他人事みたいな」感覚に襲われたという。Yさんは、白血病への罹患を、自分のこととして受け止め難かったのである。しかしながら、より詳細な検査や治療のためB病院へと転院し、血液検査や骨髄検査といった検査を行い、治療の説明を受ける場面において、Yさんの感覚に変化が生じた。

Y：実際にその診断は、それから今後の治療についてって説明があったのは、多分〔入院の〕2～3日後だったと思うんですけど、最初の告知よりもその治療のこととか、病気のこととか具体的に聞いた後のほうが、こうなんか自分のこととして本当に、なんか辛いなというか、自分がかわいそうに思えた感じです

主治医からの告知や、治療に関する詳細な説明を受け、Yさんは白血病に罹患した事実を「自分のこととして」感じ、「助からない」可能性を思い浮かべ、「自分がかわいそう」という思いを抱くに至ったのである。上記の引用でYさんは、「辛い」という表現を用いて自身の思いを表現している。Yさんの語りにおいて「辛い」という言葉は、白血病への罹患や治療に関する苦しい思いを語る際に用いられてい

る。

身体の状態を考え、検査の結果を聞いた後、Aさんはすぐの入院となった。治療生活は「辛い」ものであったが、その中でもYさんの支えとなった要因が存在し、Yさんが危機を乗り越える力を発揮していた様子が、インタビューでは語られていた。次節では、Yさんの入院生活とそこでの支え、そしてYさんが発揮していた力についてみていきたい。

2. 入院から退院まで

(1) 入院生活における辛さと支え

Yさんの治療は、2年にわたる長いスパンをかけて行われた。最初の半年が、入院をしての抗がん剤治療である。ついで、1年半の外来治療を通じ、入院中よりは少ない量の抗がん剤治療によって白血病の再発を防ぐための治療が行われた。Yさんは、入院生活および治療について、「辛かったし、再発してあれをもう一回やれっていうことになったら、ちょっと治療はいいですって言うだろうなっていうぐらいの経験だった」と語る。

具体的には、治療による副作用として生じる吐き気や、検査や治療に伴う痛みといった要因が、治療に伴う辛さとして語られた。またYさんは、心理的な辛さについても語りながら、家族の支えについて言及した。

Y：なんかちょっと、息がしづらくなって辛かった時とかは覚えてます。結局心因性のものじゃないかってなりましたけど。白血病の治療をすると、免疫力が下がるので、クリーンルームっていう無菌室に入るんですね（中略）。入る人はみんな手袋をしてマスクをしてとかいう、感染に気を付けてっていうようなので面会するんですけど、それが初めてのクールの時が続いた時、なんか辛くなったのか、結構呼吸がしづらくなって、ずっと母親にさすってもらうとか、というのがありましたね（中略）。そういうなんか結構、治療による心の負担みたいなものはあったんだろうと思いますね

治療の辛さに加え、クリーンルームという慣れない環境下におかれる中で、Yさんは「心の負担」を

感じていく。「私は助からないのか」と死を意識することによる辛さに加え、治療に伴う身体的な辛さ、そして慣れない環境に置かれた負担が重なり、「息がしづらく」なるという身体化症状として現れたのであろう。

この時Yさんは、「ずっと母親にさすってもらう」という形で家族からのサポートを受け、「辛い」状況を乗り越えていた。Yさんにとって、家族を含む周囲の人々との交流、および彼らからのサポートは、入院生活を支える大きな要因であった。

特に家族からの支えについて、Yさんは以下のように語った。

Y：母が特にやっぱりサポートではメインにしてくれて（中略）病気の時も、家族に愛されてるなっていうのは、なんて言うんでしょうね、そう簡単には病気に負けないぞとか、なんか安心できる温かい気持ちになれるっていう、根底のところ支えてくれているような感じですよ

家族からの継続的なサポートを通じ、「家族に愛されてるな」と感じる事ができたことが、「そう簡単には病気に負けないぞ」という思いや、「安心」をYさんに与え、「根底のところ支えてくれている」のであった。当時を振り返りYさんは、「満たされてたのかもしれない」と自身の思いを表現した。そして、「人とあまり比べなかった」ため、友人や同年代の看護師とも交流を持ち続けることができていたと話された。

(2) 人々との交流に楽しみを見出す力の発揮

ついでYさんを支えたのが、友人からのサポートであった。「大学は急に休むことに」なったYさんは、ごく親しい友人にのみ自身の病いについて伝えたのであった。そして、友人達との電話や手紙を通じたやりとりが、入院中のYさんを支えていく。以下、Yさんの語りをもとに、Yさんの支えとなった要因を示しながら、そこで発揮されていたYさんの力について述べていきたい。

特に、Yさんの印象に残されているのが手紙でのやりとりであった。

Y: そうですね、それぞれ書く内容が違って、文通のような形で定期的にしてるので、「こういうことがあってね」みたいな日常のこととか、あとは自分たちが大学生なので、その大学で実は大変だったとか(中略) 本当に日常の何気ないこととかを書いてきてたんです [けど]、それがなんか非常に、なんて言うんだろう、深刻にならないと言うか、こちらの日常がすごいなんて言うか、吐き気との戦いだったり、いろいろ副作用との戦いだったりする中で、その手紙を通じてなんか普通のことをさりげなく言ってくれるっていう、語ってくれるっていうことに、結構救われていたという感じ(中略) まあこういう毎日だよ、みたいなのを多分こっちは言ってたのかなと思うんですね

友人達からの手紙がYさんにとって救いとなったのは、手紙を通じ、友人達が「普通のことをさりげなく言ってくれる(中略) 語ってくれる」ためであった。Yさんの日常が、「戦い」と表現されるようなものであったのに対し、友人達は深刻になりすぎることなく、「日常の何気ないこと」を手紙に書き、伝えてくれたことが、Yさんにとって救いとなったのである。

上記の語りでは、「けど」という逆接の接続詞が用いられながら、「日常の何気ないこと」に救いを見出すYさんの姿が描き出されている。Yさんの語りでは「けど」が多用されており、危機の中でも、肯定的な何かについて語りうるところに、Yさんの力が表れているといえよう。ここでは、「けど」という逆説が用いられた後に、危機の中でも、人々との交流に楽しみを見出す力をYさんが発揮していた様子が語られている。

続いての支えが、看護師との交流であった。

Y: 確かに治療は辛かったんです [けど] (中略) 看護師さんたちも非常に優しくかったですし、中には私と年代も近い方もいたので、結構 [病室に] 来てくださる方とおしゃべりしたりとか、交流を持つことが楽しくて

Yさんは、「治療は辛かった」「けど」、病室を訪れてくれる看護師と、「おしゃべりしたりとか、交流を持つこと」を楽しむという力を発揮していた。また、この時Yさんは、純粋に看護師との交流を楽しむだけではなく、友人に伝えられるような、「楽しいエピソードはないかな」と探していたのだとも語られた。

Y: 大変なんです [けど]、なんか楽しいエピソードはないかなというのを探してて、友達に面白おかしく言っていた気がします。なんか、なんだろう(中略) 食事ですよ、って [看護師が] 言ったら、キャーって、ガチャンって、[食事の入ったトレイを] ひっくり返してしまったことがあったりとか、ごめんなさい、また持って来ますねとか、でもその場合はもうなんか温かいものじゃなくて、なんか発泡スチロールみたいな器に入れ替えられて来るみたいなこととか、なかなか日常ではあんまりないエピソードみたいなものですかね(中略) あとはなんか、ペットボトルにおまけで付いてくるキーホルダーとかを、全種類コンプリートしようと思って集めていたのを見て、この種類だけちょっとないっていうのを、それを見て看護師さんが、私、持ってるって言ってくれたりとか、そういうエピソードとか(中略) 無理矢理 そういうのをちょっと面白く友達に言うって いうのが長電話の内容でした

上記の語りでも、「けど」という逆接が用いられ、「大変」な状況下においても楽しさを見出し、それを他者と共有せんとしていたYさんの力が描き出されている。看護師との交流は、それ自体が楽しいものであるだけでなく、友人との電話にも結びついてきた。「日常ではあんまりないエピソード」を見つけ、そのエピソードを「無理矢理(中略) ちょっと面白く友達に言う」のが、「長電話の内容」だったのである。看護師との交流は、友人との交流にも結びつくという点において、Yさんにとって大切なものであったといえよう。

(3) 現実を的確に認識し、未来を志向する力および行動力の発揮

Yさんは、家族や友人、看護師との交流を支えにしながら、厳しい治療生活を乗り越えていった。そして、入院中のYさんは、自らの進路に関する大きな決断をする。もともと、第一志望の大学に行けなかったことや、進学先が県外の大学であったこともあり、「C県〔Yさんが進学した大学のある県〕に帰ってそこで通院をしながら無理だろう」と考え、「もう思い切って〔大学を〕受けなおそう」と決断したのである。

その時の思いを、Yさんは以下のように語った。

Y: そうですね、話しているといろいろ思い出して、病気の話は数々あるんですけど、当時大学2年生だったので、2年生だったんですけど、行ってる大学が第一志望じゃなくて、どこかで大学院行くとかなんか挽回したいと思ってたんですね(中略) 病気になったから、ちょっと現実的に考えてもそこに、C県に帰ってそこで通院をしながら無理だろうと、治療できる病院近くにないし(中略) もうそこでは先は考えられない。じゃあどうしようっていった時に、受けなおそうかと思って、大学を。もう思い切って受けなおそうというのを決めて(中略) 入院中も早い段階で決めて、その先を考えてましたね(中略) これを機会に受けなおそうっていったのも、なんか今後の人生の目標ができたり、なんかそれをきっかけに私変わるみたいに、前向きにその病気っていうのを、きっかけに捉えられたっていうところはありますね(中略) やっぱり、そうしていたほうがなんかちょっと未来に向けて、っていうように思うんですよね。大変だろうなとは思ったんですけど、なんかやるだけ、なんか人生終わるかもしれないだし、やれることをやるだけやったらどうだろう、っていうふうになんか思ったんですよね

上記の語りは、白血病の治療についての語りから、話題がスライドする形で述べられたものである。「病気の話は数々あるんですけど」と逆説を用いながら、「病気の話」ではなく、「その〔入院および治療の〕先

について述べられていることから、現実を的確に把握しながらも、未来を志向する力をYさんが発揮していた様子がうかがえる。

そして、Yさんは、「入院中も早い段階で〔再受験を〕決めて、その先を考えてました」と述べている。「これを機会に〔大学を〕受けなおそう」と考え、「今後の人生の目標」を作ることで、「前向きにその病気っていうのを、〔再受験の決断を〕きっかけに捉えられた」のである。再受験の決断を行うことで、白血病への罹患という経験が、「前向き」な意味合いを持つものと意味づけられていったのであろう。

このような決断を行った背景には、「人生終わるかもしれない」というYさんの思いがあった。しかしながらYさんは、「人生終わるかも」と考え不安に駆られるのではなく、「やれることをやるだけやったらどうだろう」と考えたのである。その結果として、Yさんは大学を再受験し、自らの人生プランを作り直すことを決断した。未来を志向するだけでなく、その実現に向け、自ら考えた選択肢を実行に移す行動力をYさんは発揮していったのである。

Yさんは、200X年3月に入院をし、約半年後の同年8月に退院を果たした。そして、通院しながら予備校に通い、大学受験に向けた勉強に励むこととなった。Yさんは、臨床系の学部を目指して合格を果たし、取得した資格を活かして現在も働いている。

3. Yさんの今の思い—経験を肯定的に意味づける力の発揮

治療と並行して受験勉強に励んだYさんは、いくつかの大学を受験し合格、現在に至るまで自身の資格を活かした仕事を続けている。最後に、Yさんの人生を大きく変えた白血病への罹患について、インタビュー時におけるYさんの思いを引用したい。ここでは、Yさんが、自らの経験を肯定的に意味づける力を発揮している様子がうかがえる。

Y: 病気っていうのをきっかけに、そういうふうに再挑戦ができて、結構人生が変わったと思っているんです。生きてるだけでも素晴らしいと思えるし、挑戦できる、させてもらっているありがたさとか、あと支えてくれる人たちの思いとか、そういうのをとても身に染みてありがたいと思

るのと、今の時間を精一杯生きるというのを、そうですね、そういうふうに思えるきっかけにさせてくれたというふうに捉えていますね、病気の発見というのは、なければならないことはないものだと思うんですけれど、病気になるっていうことは、でも、それで非常に得るものはあるなど思っていますね。結構前向きに考えるようになりましたね

白血病への罹患は、Yさんが大学受験に「再挑戦」する「きっかけ」となり、人生プランを大きく変えることになった。それに加え、「生きてるだけでも素晴らしい」という思いや、さまざまなことに挑戦できることへの「ありがたさ」、そして「支えてくれる人たち」への感謝を感じさせてくれる「きっかけ」ともなった。

上記の語りでは、「けれど」および、同じく逆説を示す「でも」という接続詞が用いられ、病いは「なければならないに越したことはない」ものの、その経験から「非常に得るものはある」と、自らの経験が肯定されている。白血病への罹患は、Yさんが「今の時間を精一杯生きる」ことを可能にすると同時に、さまざまなことに挑戦していこうとする「前向き」な姿勢の確立に寄与したのである。人々と交流し、未来に向け行動する中で、経験を肯定的に意味づける力が発揮されていったのであろう。

IV. 考察

前章では、ライフヒストリーを提示しながら、Yさんの発揮していた力について論じた。本章では、それらの力と先行研究との結びつきを指摘していく。

1. Yさんが発揮していたレジリエンス

(1) 人々との交流に楽しみを見出す力

前章で述べたように、Yさんは自身を取り巻く人々との交流を楽しみ、支えとしていた。家族や友人をはじめとした周囲からのサポートが存在し、そのサポートを受け止められることは、個人を支えるレジリエンスであるとされる^{9,13)}。Yさんにおいても、周囲の人々からサポートを受けていることを認識し、自らの支えとして活用する力が備わっていた

といえよう。

(2) 現実を的確に認識し、未来を志向する力および行動力

またYさんは、入院時より、自身の状態ではC県の大学に通い続けることは難しいと判断し、大学の再受験を決意していた。現実をふまえた上で、肯定的な未来を志向できることは、個人を支えるレジリエンスとなりうる^{14,15)}。Yさんの場合も、病いを得ることによって自身が身を置くこととなった現実を的確に認識した上で、未来を志向する力が発揮されていたと考えられる。

加えて、望ましい未来を思い描くだけでなく、その実現に向けた方略を考え、実行する行動力も、指摘すべきYさんのレジリエンスであろう。先行研究¹⁴⁾が指摘するように、自身の体調や感情をマネジメントしながら、目標の達成にむけ行動できることは、レジリエンスを構成する重要な個人要因と言える。Yさんにおいては、現実を的確に認識し、肯定的な未来を志向する力と行動力に結びつけたことが、「再挑戦」を含んだ人生プランの実現を可能にしたと考えられる。

(3) 経験を肯定的に意味づける力

最後に指摘したいのは、Yさんが自らの病いを、人生を肯定的な方向に変化させてくれた「きっかけ」と捉えている点である。経験を肯定的に意味づけられることは、人間のレジリエンスにおいて極めて重要な要素である¹⁵⁾。Yさんは、入院早期から自身の病いを「再挑戦」のきっかけと捉えただけでなく、インタビュー時も、「非常に得るものはある」と前向きな考えを述べていた。病いを肯定的に捉える力、より広くいえば、経験に肯定的な意味を見出せる力は、Yさんを支えたレジリエンスの重要な一環であるといえよう。

入院早期から自身の病いを「きっかけ」と捉え、人々と交流する力や未来に向け行動する力が発揮され、自身の考えた人生プランが成立していく中で、Yさんには病いを肯定的に捉える見方が身についていったのであろう。Yさんの力が結実する形で、病いの経験からも「非常に得るものはある」と、危機

的な経験を肯定的に意味づける力が高まり、前向きな姿勢が確立していったと考えられる。

2. 先行研究との比較を通じて考えるAYA世代がんサバイバーのレジリエンス

続いて、先行研究¹⁰⁾における議論との比較を通じ、AYA世代がんサバイバーのレジリエンスについて理解を深めることを試みたい。先行研究¹⁰⁾の議論では、周囲からのサポートの重要性が指摘され、経験を肯定的に意味づける力や、自らの望みを現実化する力がAYA世代がんサバイバーのレジリエンスとして挙げられており、Yさんが発揮していたレジリエンスとの結びつきが指摘できる。特に、がん罹患したことで自らの進路について再考し、自身の望む未来を実現していったYさんの経験からは、自らの望みを現実化する力の内実として、現実を的確に認識した上で未来を志向する力、およびその実現に向け行動する力の存在が示されたと考えられる。

一方、思春期のがんサバイバーの場合、他者からどう見られるかについての敏感さから、他者と自身を比較してしまいがちとなり、サポートの受容が難しくなる場合もありうると先行研究¹⁰⁾では述べられているが、Yさんにおいてはそのような事態が生じていない。この点は、特筆すべきポイントであろう。Yさんの場合、思春期を乗り越えていたことも、そのような事態が生じなかった一因と考えられるが、家族から愛されているという思いや満たされている感覚があったからこそ、他者と比べることなく信頼関係を築き、他者との関わりを自らの支えにできたのではないだろうか。

家族との間に情緒的な絆を形成できている個人は、肯定的な自己観および他者観を形成しており、他者に対し援助要請を行うことに対する抵抗感が低く、他者からの援助を受け取りやすいとされる¹⁶⁾。Yさんの場合も、家族との間に情緒的な絆が形成されていることが、人々との交流に楽しみを見出す力の発揮を可能にしたものと考えられる。言い換えれば、重要な他者との間で安定した愛着が形成されていることが、AYA世代がんサバイバーがレジリエンスを発揮する上で、基礎の一つになりうると推察される。

V. まとめ

本研究では、Yさんが発揮したレジリエンスとして、人々と交流しそこに楽しみを見出す力と、現実を的確に認識した上で、未来を志向し行動に移す力、および行動力、そして病いの経験を肯定的に意味づける力を挙げた。また、AYA世代がんサバイバーがレジリエンスを発揮する上で、重要な他者との間で愛着が形成されていることが重要である可能性を指摘した。

本研究の限界として、インタビューの回数および時間が限られており、得られたデータが厚みに欠けた可能性が指摘できる。今後の研究では、インタビューの回数や時間を見直し、インタビュイーとインタビュアーとの相互作用にも注目しながら、ライフストーリーの記述をより厚いものにし、レジリエンスが発揮されるプロセスを詳細に明らかにすることを試みたい。

引用文献

- 1) 森 雅紀：臨床家が知っておきたい若年成人がん患者の特徴，緩和ケア，25(6)，464-469，2015
- 2) 森 雅紀・柏木夕香：特集にあたって，緩和ケア，25(6)，462-463，2015
- 3) 清水千佳子：AYA世代のがん患者に関する研究と支援体制，血液内科，75(6)，765-769，2017
- 4) 武田鉄郎：AYA世代のがん患者の教育・就労支援の現状と課題，小児看護，38(11)，1368-1372，2015
- 5) 鷹田佳典・土屋雅子・田崎牧子・高橋 都：小児期，思春期・若年成人期発症がん経験者が就職活動時に直面する困難と情報・支援ニーズに関する探索的研究，日本保健医療行動科学会雑誌，33(1)，29-38，2018
- 6) 厚生労働省：がん対策推進基本計画（第3期），<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000196975.pdf>，情報取得 2021/6/01
- 7) 有末 賢：コメント サバイバーの生き方，三田社会学，23，66-72，2018

- 8) 太田美里・岡本祐子：レジリエンスに関する研究の動向と展望－環境要因と意味づけへの着目－，広島大学心理学研究，17，15-24，2017
- 9) 砂賀道子・二渡玉江：がん体験者のレジリエンスの概念分析，北関東医学，61(2)，135-143，2011
- 10) 日高直保：AYA 世代がんサバイバーのレジリエンスに関する質的研究－Kさんのライフヒストリーから，質的心理学研究，20，51-62，2021
- 11) 前田陽子：思春期に小児がんを発症した患者の入院体験－小児がん経験者の語り，日本小児看護学会誌，22(1)，64-71，2013
- 12) 小林多寿子：インタビューからライフヒストリーへ語られた「人生」と構成された「人生」，ライフヒストリーの社会学（中野 卓・桜井 厚（編），43-70，弘文堂，1995
- 13) 仁尾かおり・藤原千恵子：先天性心疾患をもつ思春期にある人のレジリエンスの特徴，日本小児看護学会誌，15(2)，22-29，2006
- 14) 平野真理：レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み，パーソナリティ研究，19，94-105，2010
- 15) Steven M. Southwick. & Dennis S.Charney: Resilience: the Science of Mastering Life's Greatest. challenges, Cambridge University Press, 2012 (森下 愛訳, 西 大輔・森下博文 監訳：レジリエンス 人生の危機を乗り越えるための科学と10の処方箋, 岩崎学術出版社, 2015)
- 16) 馬場康宏：青年期の愛着スタイルと被援助志向性，東京成徳短期大学，48，47-54，2015